第 22 回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会　　高校生部門

皆さんのテクニックの高さに感銘を受けました。テクニックは音楽的な個性を築くための基礎となります。私たちピアニストは「本質的なこと」― つまり「よい（適切な）音の質」を探し求める必要があると思います。それはもちろん作品の本質と忠実に結びついた音でなければなりません。作品の「プロット（筋書)」、意味、そして雰囲気を理解したら、作品にふさわしい音のパレットを広げていくことが出来るでしょう。

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではございません

みなさん、ショパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会へのご参加おめでとうございます！

世界中で大きな影響を引き起こしているコロナ禍という大変困難な状況下においても、今年もみなさんのしっかりと準備された素晴らしい演奏を聴かせて頂けたことをとても嬉しく思います。みなさんの才能と努力、それからこのような状況にも関わらずご尽力された先生方に心からの拍手を送りたいと思います。私からのメッセージと致しまして、いくつか気づいたことをお伝えしたいと思います。

まずはじめに、どんなコンクールであっても参加する際に覚えておかなければならないのは、コンクールそのものが目的になってはいけない、ということです。コンクールというのは、あくまで自分とは違った視点や意見を持つ人たちと出会い、自分の考えや解釈を他者と共有し、時に自身を鼓舞したり自分の技量をチェックする方法でしかありません。真の目的は音楽や芸術、そして自身の成長でなければなりません。さまざまな経験を通して、自らの感受性や感情をより豊かにし、音楽への理解を深めましょう。

レパートリーに関しては、適切に賢く選び、自分にとって良い選択をすることが必要不可欠です。常に難曲に挑戦することが良いことだとは限りません。

ピアノ演奏全般にいえることですが、特にショパンを演奏する際には、下記のようなことに注意してみてください。

・自然な歌い方で、音楽が語りかけるように。旋律が横へ繋がっていくとイメージし、音楽的で自然な「呼吸」を意識すること。
・長いフレーズを作り出し、全てのモチーフやフレーズを形作ること。また同時に、まとまりとしての一体感も感じること。
・美しく、歌うように、多彩でよく響く気品のある音（レガートやベルカント唱法をイメージして)。
・形式、和声、音楽的なジェスチャー（音や声部の流れ・動きなど）など、音楽の構造を意識すること　。
・作品の歴史や作品にまつわる秘話などについてリサーチするとともに、自分自身が聴衆と共有したいアイデアについても考えを深めること。
・曲の性格や特定のジャンルの作品の由来などを知ること。(特に踊りにおいては、その踊りが民族音楽なのか、宮廷舞踏なのか、あるいは国民的な音楽に基づくものなのかを理解することはとても重要です)。
・よいバランス（声部と声部のバランス、全体的な構成における様々な層のバランス、和声の中の音と音のバランスなど)。
・演奏の助けとなるような、よいペダルの使い方を工夫すること。また、ペダルの様々な使い方を研究すること。（良いペダルの使い方というのは、使用する楽器、その場所の音響、その瞬間に音楽に必要とされているものによります。)
・背中、肩、腕、前腕など体の一部または全部に余計な緊張感が入らないように。
・自分がやりたいことが実際に音として聞こえているかどうか、客観的に聴いてみること。
・ピアノを演奏している最中、自分も傑作の創造の過程に関わっているんだという喜びを感じること。

みなさんの益々のご発展をお祈り申し上げます。

※本コメントは、複数の部門に対して総括して書かれたものであり、特定の部門に対して書かれたものではございません

コンクールの目的の一つとして、若いピアニストのみなさんにとって教育的な側面がなければならないという事務局の考えに強く賛同します。もちろん、若いピアニストのみなさんの演奏を直接聞くことができない状況において、十分に責任をもって自分の印象やアドバイスをお伝えすることは非常に難しく、ほとんど不可能に近いことです。ですから、今回はショパン in ASIA の全ての部門において当てはまるであろう一般的な事柄について私の考えを述べさせて頂きたいと思います。

今回審査をする中で、芸術的な個性が足りていない、あるいはまったく感じられないという印象を受けた演奏がいくつかありました。一方で、全ての音を正確に弾くことや、先生に言われたことを忠実に守ることに注力しすぎていると感じられる演奏もありました。残念ながら、自由で柔軟性があり、想像力に溢れる演奏はそれほど多くはありませんでした。正確ではあるものの、楽譜に書かれていることが機械的に再現されているだけだったり、律動的でメトロノームのようなテンポの演奏もありました。このような弾き方や音楽の理解の仕方では、若いピアニストの芸術的な個性、そして音楽的な想像力や音楽に対する深い理解力を伸ばすことができません。

日々の練習の仕方を見直してみましょう。メトロノームは重要な指針です（ですが、あくまでも指針にすぎないのです)。しかし、もしコンサートやレコーディングで、語るようなフレーズの代わりに、メトロノームの音が感じられたり聞こえてきたとしたら、それは完全な間違いです！楽譜に書かれている全ての音、休符、アクセントが聞こえてきたとしても、それらが曲を語るうえでどのような役割を担っているのかが理解されていないのです。そのような機械的な演奏は、特にショパンの作品のように深く語り掛けるような解釈が求められる作品にはそぐいません。

若いピアニストと一言で言っても、年代によってそれぞれの抱える問題は根本的に違うということはもちろん理解しています。しかし、技量のレベルが違うということはさておき、年代に関わらず、自然で創造的で自由な表現や、音楽を楽しんでいる姿が聴こえたり見えたりするとよいと思うのです！特に「自然な表現」ということを強調しておきたいと思います。人工的に外から得たものや、時に音楽の内容への理解の程度を示唆するようなわざとらしく大げさな身振り手振りや動きに基づくものであってはなりません。

もう一つよくある問題として、いわゆる「音楽を表現すること」と「情熱的な演奏」の違いをきちんと理解することが挙げられます。残念ながら、表現というものは速いテンポや強弱に密接に関係していると考えているように思われる若いピアニストの解釈にしばしば出会います！私の意見では、これは最も根本的な音楽における間違いや解釈上の誤解の１つです。音楽的な表現はテンポや強弱によって生み出されるものでなく、演奏者の精神、深い想像力、芸術的な個性から生み出されなければなりません。つまり、テンポや強弱の解釈というのは、単に必然的な想像力の結果でしかありません。

最後に、芸術的な想像力や、それを聴衆に伝えられる能力も大切です。ピアノ演奏におけるこれらの課題を理解するということが、「よいピアニスト」と「想像力に溢れる素晴らしい芸術家」との違いを生み出します。若いピアニストのみなさんが、そのような音楽の理解や解釈上の問題を探し求め、それらに取り組まれるようお祈り申し上げます！

とても水準の高い演奏でした。みなさんそれぞれ良いところがたくさんありました。エチュードは技術にとらわれることなく、イメージを持って表現するという感覚になると、さらに伝わる演奏になると思います。自分を信じて先に進んでください。

アジア大会ですので、皆様素晴らしい演奏でした。手堅くまとめようとせず、もっと自分の主調、個性、ショパンの世界を奏でてほしいと思いました。

アジア大会に残られた力のある方々ばかりでした。

・テクニックもあり、ひたすら弾かれるが、音楽の広がり、ユーモア、お話しの良く分からない方もいらっしゃったと思います。

・録音の場所の響き具合、ピアノの音質で損をしていらっしゃる方も残念でした。

まだ、高校生なので、将来これから一番期待出来る年代なので楽しみです。

それぞれ熱のこもった演奏で、中でもいくつか特に感動的な演奏に出会うことができたことは大変幸せなことでした。一方、技術面では優れているものの、表現が幼かったりファンタジーが不足していたりする演奏も散見いたしました。

高校時代は、心身がある程度安定し、音楽に対する知識も充実して、表現の幅を大きく広げる時です。目の前の作品に対して、どのようなアプローチで取り組むか、楽譜という白黒の世界から、どのような色彩を引き出すのか・・・、自分の意思を基に、視野を広げた勉強を貪欲にしていってください。そして、ほんのちょっとした響きの変化に心を寄せることができたときの喜びは、これから一生ピアノとともに歩むための原動力となることでしょう。主観と客観のバランス、直感と思考のバランスを大切にしながら、今の年代だからこそできる表現や、冒険も試み、そして時に悩みながら、自分と音楽に向き合っていってください。